

え直すことを目的としている。しかし、立法過程については非常に詳細な考察を行なっているのとは対照的に、運用面の分析については物足りなさを感じる。著者は、協議過程で醸成された「共通了解」「相互主義」(pp. 37-38) がすべての当事者に政治制度を遵守させる効力をもつと主張するが、実証部の検証からは、各主体が自己に都合の良いように憲法や法律を解釈し納得している様子が伺われる。そもそも、立法過程を中心とした議論から政治制度について論ずることが適切なのかという点にも疑問を感じる。権威主義体制においても少数派に対する慰撫は皆無ではないからである。司法については、本書では十分に言及されていないが、著者が「逸脱事例」と評する第6章の事例の背景には、司法が行政に対して不利な判決を下すようになった事情が存在する。司法の変化や判決内容についても詳細に検証することにより、マレーシア政治体制の内実をより鮮明に描き出すことが可能となるのではないだろうか。

こうした若干の問題を含みながらも、本書の下院議事録などの調査にもとづいた綿密な分析は称賛に値する。各主体の認識にまで調査領域を広げた著者の斬新な視点は、マレーシア政治体制研究以外の領域からも広く関心を集めるものと思われる。今後も著者による野心的な研究成果を期待したい。

日下 渉、『反市民の政治学—フィリピンの民主主義と道徳』法政大学出版局，2013年，442 p.

青山和佳*

若きフィリピン研究者による傑作として本書を祝福したい。民族誌的現地調査と理論的検討の往来に粘り強く挑戦し、フィリピン政治理論への寄与に幸いにも成功したからのみではない。著者の日下渉は、スラムに生きる人びとの声を皮膚感覚により傾聴するという行為の意味を私たちひとりひとりに問いかけている。本書の原型は、2012年3月に九州大学大学院比較社会文化学府に提出された博士論文である。著者はいかにしてこのような珠玉の作品を生み出すに至ったのか。内容を紹介したうえで、ディシプリンも直接の調査対象も異なるものの、フィリピンの貧困層をフィールドワークにより研究してきた立場から評者なりに考えてみたい。

本書は全8章から構成される。まず、序章により、本書のコンセプトを紹介しよう。本書の課題は、現代フィリピン民主主義を市民社会で争われる道徳政治という視座から分析することである。従来の所説では、経済発展によって中間層が増加し、より多くの人びとが高い「市民」意識をもって政治に参加するようになれば、民主主義の定着と深化が進むであろうと主張されてきた。しかし日下は、フィリピンの民主化以降の政治を分析することにより、この支配的な想定を否定す

* 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院

る。1986年のピープル・パワー革命による民主化以降のフィリピン政治では、「市民」が促進しようとする政治のあり方は必ずしも貧困層の利益を促進するものではなかったからである。

なぜ「市民」（中間層）は、民主主義の定着と深化に対して両義的な役割を果たしてきたのであろうか、というのが、本書の基本的な問いである。結論を先取りにすれば、その答えは「政治の道徳化」にある。日下が強調するように、「政治の道徳化」は、新自由主義との親和性が高く、フィリピンだけの問題ではなく、日本を含めた多くの民主制とも無縁ではない重要な問題である。フィリピンは、深刻な階層分断、民主制度の脆弱さ、限られた財源といった条件のもとにあるがゆえに、道徳政治の問題が表れやすいと同時に、その隘路を切り開こうとする実践も豊富である。フィリピンの事例を検討することで、新自由主義下の道徳政治の問題を明らかにし、それを打開していく可能性を模索することも本書の狙いである。

フィリピンにおける道徳政治に切り込むために、日下は「市民」のよりリアルな捉え方を提示する。中間層である「市民」とは決して、先験的・固定的に民主的な政治的性格を備えた実体ではない。むしろ、中間層が正しき「市民」として自己定義するためには、悪しき「非市民＝大衆」という対抗概念を作り出すことが必要であり、それゆえに、すべての人びとを「市民」に包摂することはできない。本書の命題は、「市民社会におけるヘゲモニー闘争は、組織化されていない一般の人

びとも含めて『我々／彼ら』という道徳的な対立関係を構築しており、その偶発的な変化の動態が民主主義の促進と阻害を強く規定している」というものである。

ヘゲモニー闘争を規定する制約は社会によって異なる。フィリピンの場合、階層分断がとくに深刻な影響を及ぼしており、それを分析の基盤に据えるべく、日下が導入する鍵概念が「二重公共圏」である。これは、言語と教育、メディア、生活空間の格差によって分断された中間層と貧困層の生活世界と言説空間の双方から、「市民圏」、「大衆圏」、および両者の「接触領域」を設定するものである。接触領域では、さまざまな社会運動が展開され、市民圏と大衆圏の異なる人びとの言説を媒介することで、国民の道徳的分断を調停する試みが図られてきた。階層の境界線の定着性に比べ、道徳の境界線（異なる善悪の概念をめぐる引かれる）は、より流動的である、という。

以上のような全体のコンセプトのもとで、第1章は、フィリピンの民主化の現状とそれを説明する従来の説を検討し、「二重公共圏のヘゲモニー闘争」という分析の枠組みが提示される。第2章では、この枠組みを補強するために、植民地主義、国民国家建設、そして資本主義の発展のもとで、いかに二重公共圏が形成されたのか論じられる。つづく、第3章～第6章は、この枠組みを用いて民主化後のフィリピン政治を事例分析している。具体的には各章において、大統領追放を要求した3つのピープル・パワー、選挙をめぐる道徳的対立、都市統治をめぐる道徳

的対立、道徳的ナショナリズムの再興を取り上げている。これらを踏まえて、序章で提示した命題を立証した。終章では、本書においてフィリピン政治を分析する新たな理論的視座を提示したことを確認、政治が道徳化することの危険性を改めて整理したうえで、フィリピンにおける道徳政治の台頭をマクロな構造的条件のなかに位置づけつつ、その隘路を開く方途について若干の理論的な試論を試みている。

本書の貢献は、ひとことでいえば、フィリピン政治を分析する新たな理論的視座を提示したことである。この点は、著者自らも強調しており、広く読者一般に共有される本書の価値であろう。それでは、著者はいかにしてこのような価値ある作品を創り出すに至ったのだろうか。その要因は複数であり、偶発的なものもあっただろう。しかし、その全体を貫くプリンシプルは、日下の用いた研究の方法にある。著者自身はそう明言していないが、評者にとって、本書はエスノグラフィーである。しかも、それは「エスノグラフィーを行なう」(doing ethnography)という意味でそうなのである。著者はその行為において誠実であり、基本に忠実であろうとした。その魅力を3つにしばって指摘したい。

第1に、日下自身が「そこに在るだけでなく、実際に触れてみた」ということである。それ自体は、フィールドワーカーなら基本中の基本にすぎない。だが、「当たり前にできそうなことでも、掘り下げてみれば簡単ではない」とは、評者が敬慕するアイヌの古老の言葉である。この古老は研究者の調査対

象となってきたが、この頃、ご自身のルーツを自らも調べるようになり、わかったのだという。「根拠不明の噂話から具体化すれば、相手を見誤ってしまう危険が付きない。しかし、その場所まで足を運び、そこに身をおいて、眼でみて、資料があれば読み、相手に近づき話をきけば、より豊かに分かる。何かを記録して伝えようとするときは、そのような責任のある方法をとらねばならない。」この一歩踏み込む姿勢が日下にはあり、現実の多面的理解を可能とした。

第2に、著者は、「そこ」をマニラのスラムに限らなかったということである。本書の序章第2節「調査の対象と方法」をめくり、調査の順番と内容に注意して読んでほしい。先行研究と新聞記事を渉猟してから、フィールド調査を開始していることや、最初のフィールド調査と2回目の間に数年間空いていることがみてとれる。日下の主たる調査地はケソン市の不法占拠地区であり、そこで露天商家族と同居し、自らも街頭販売したことも意味がある。しかし、同時に、市民圏の中間層にもインタビューをとっているし、フィリピン市民圏出身の友人や知識人、日本の研究者や友人・先輩などと交流もしている。索引と参考文献で47頁という厚さに表れている、多くの先行研究との「対話」も見すごせない。日下の標本抽出方法は、どこか「自らの親密圏」に拠ってしまった分、社会調査の技術的観点からみて難なしとはいえないにせよ、事例と理論を豊かに展開するために工夫と努力が重ねられたことは間違いない。

第3に、こうした「旅」の全体が、著者

をして本書の構想を育て、なおかつ書ききったことで、本書は「時間的に開かれた」1冊となった。日下は、過去の人びとと未来の人びとをともに光で照らし、両者をつなぐような「現在」をつねに織り成すことができるような、生きた贈り物となる作品を生んでいく。ここでいう過去の人びととは、著者によってその価値を改めて見いだされた先行研究を書いた研究者であり、それらによって書かれた対象となった人びとである。また、未来の人びととは、それぞれの「現在」において、本書を受けとり、読み、感じ、考え、あるいは語り、それぞれに本書を読む前とは何らかの点で異なった世界観をもって、新たに生きていくような人びと、および本書を直接読まずとも、そのような読者と出会うであろう多くの人びとを含んでいる。

なお、本書がマニラ首都圏のみを舞台に「フィリピン政治研究」を名乗っていることについて、素朴な疑問を抱く読者もあるかもしれない。ミンダナオの都市に暮らす少数民族でいまの段階では地方選挙への投票もままならないような人びとを研究対象としてきた評者もほんの一瞬、そのような疑問にとらわれた。しかし、この作品にそのように対峙しては、本質を見誤るといううえでもったいないし、すべての読者を満足させる完璧な作品などはない。大切なことは、書き手が必死で投げた言葉を読み手が真剣に受けとめられるかどうかである。だから、本書の主張は自分の知っている「フィリピン」には当てはまらないという読者は、日下の贈り物を受けとったうえで、自らの現場に行き、新

しい課題を新しい方法によって探究し、自らの応答責任を果たせばよい。研究は、私たちの日々の暮らしと同様に、つねに共同で創られていくものである。

最後に、本書の内容に戻り、著者への問いを記してこの書評を締めくくりたい。本書の示唆する社会的分断に抗する処方箋は、つぎの3点である。すなわち、①複数公共圏の間で、具体的な人びとが出会う接触領域を拡大していくこと。②接触領域において、善悪をめぐる最終的な定義を保留したコミュニケーションを継続的に実践し、道徳的対立の昂進を抑制すると同時に、政治を改めて利益のレベルに落として不平等の改善に取り組むこと。③「すべき」という道徳の統合性に頼るのではなく、人びとの自発的な共感や共苦を新たに紡ぎ出していくこと。日下は、これらの処方箋はまだ示唆の段階であり、理論研究・事例研究に基づいてその有効性を検証していく必要があると述べ、今後の研究課題とを「分断を経たうえでの新たな共同性の可能性」とした。

日下が示した処方箋におけるキーワードのうち、評者の心をもっとも揺さぶるのは、他者への「自発的な共感や共苦」である。なぜなら、評者もまた、自らが人と出会うときの根本的な原理が共感や共苦であってほしいと願うからである。評者にとって、共感と共苦はひと組である。つまり、ともに苦しむことは共感であり、それはどちらも「愛」である。本書をもって自ら接触領域を生成してみた著者のフィリピンに対する愛情の深さはよく伝わる。しかし、より一般的に問うなら

ば、私たちはいかにして、道徳に頼らずに、他者に共感し共苦することができるのだろうか。それはいったい自発的でありうるのだろうか。この点で本書は、社会的分断を生きる現代の私たちに、よりよき生き方を考えるためのヒントを与えてくれる、哲学の書なのである。

柄木田康之・須藤健一編。『オセアニアと公共圏—フィールドワークからみた重層性』昭和堂、2012 年、320 p.

紺屋あかり *

本書は、オセアニア新興国における公共圏の出現とその動向に焦点を当て、国民形成の文化論を展開するものである。オセアニアの研究に公共圏の概念を最初に持ち込んだのはリプーマ [LiPuma 1997] であるが、リプーマも指摘するように本書でいう公共圏とは、市民社会の形成が「国民」を想像する共同体といういわゆる西欧的概念の中に捉えるものではなく、オセアニアにみられる国家や一元的市民社会に対立する共同体への決定的な指向性であると想定されている。伝統的には小規模社会からなるオセアニア地域における国家に対するアクターとしての「国民」や「国民意識」がどのように創造されうるのかという点が、本書に設定された問いである。そこで、独立以降のオセアニア社会がもつ重層的な公共空間について、交易ネットワーク、メディア、贈与空間、ディアスポラ、多言語、

宗教、紛争など多領域において設定された問題群からフィールドワークにもとづいた具体的な事例をもとに検証している。

本書は三部から成り、第 1～7 章で構成されている。公共圏の重層性（第 I 部）、トランスナショナルな公共圏（第 II 部）、多配列な公共圏と単配列な公共圏（第 III 部）を表題とし、ミクロネシア連邦ヤップ州、ソロモン諸島、フィジー共和国、サモア独立国、ヴァヌアツ共和国、パプアニューギニア、キリバス共和国、パラオ共和国（以上章順）を対象とした事例を提示している。以下に各部（章）の内容を概要する。

第 I 部では、地域・親族など既存の人的諸関係からの「離脱」と「無縁化」において新たに形成される公共圏を中心に議論がすすめられる。人びとの社会関係が規範性から重層性へと推移する動態や、伝統的空間と新たに形成された公共空間との重なりについて事例から検証されている。第 1 章では、ミクロネシア連邦ヤップ州離島の交易ネットワークにみる民主主義的制度の発展と本島離島関係の二元化を実証的に明らかにしたうえで、公務員アソシエーションの果たす対抗的公共圏の役割を指摘し、伝統的な交易パートナー関係（サウエイ）がサバルタンな公共圏を形成していることを明らかにしている。第 2 章では、1998 年から 2003 年までソロモン諸島で続いたエスニック・テンションと呼ばれる国内紛争をきっかけとした州レベルの分離運動から、開発的公共圏について検証している。「疎外」されるのではなく「離脱」する市民社会に目を向け、開発をめぐる揺れ動

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科